

市民の科学か、国民の物語か

——松尾浩一郎『日本における都市社会学はどう形成されてきたか』をめぐって——

山室 建徳

初めに

今年(平成27年)の4月半ばと記憶するが、当方の研究室に同僚の松尾氏が、わざわざ御著書『日本において都市社会学はどう形成されてきたか』(ミネルヴァ書房、2015年、以下発行年は引用文献の表記による)を直接届けられた。慶應義塾大学大学院社会学研究科で博士号を取得された大作である。しかし、その後約一ヶ月の間、机の上に積ん読状態にあった。都市社会史の研究ならばともかく、都市社会学の研究史を部外者が読んでも、さして面白くはなからうと思いついていたためである。しかし、ある日何気なく頁をぱらぱらとめくっていると、東京の都市発展の様相を示す興味深い地図が載っていることに気づいた。考えてみれば当たり前だが、この本は近代日本の研究者が、目の前に広がる都市発展をどう見てきたか、その観察方法の変遷を追った研究書である。それ自体が近代日本史の興味深い一側面ではないかと思いつき、読み始めた次第である。

通読して何より印象的だったのは、実にきめ細かい著者の筆遣いである。一つ一つの事柄について、隅々まで行き届いた考察が繰り広げられ、頭の中にすっきりと整理されていく楽しい経験ができた。そして、自分が一応専門としている文献歴史学の手法と比較しながら、啓発される論点が多々あった。それについて、当方の感想をまとめ、著者のご教示を得たいと思い、松尾氏に提案したところ快諾を得た。本論はそうしたいきさつで書かれたものである。以下の文章では、著書の内容を満遍なく紹介するつもりはない。当方が特に関心を持った点を拾い上げて、感想を述べるに過ぎない。拙文を読んでこの書に関心を持っていただいたのならば、ぜひ直接ご一読いただきたい。

1. 歴史学の方法

本書では、社会調査という都市社会学を支える手法の変遷を軸に、分析が行

われている。これと対比させる材料として、最初に自分がなじみのある文献史学の方法について簡単に触れておきたい。

歴史を研究する場合、使われる材料はたまたま残された文献がほとんどである。建造物・遺跡や彫刻・絵画、あるいは近代史での写真・音声・映像や聴取りも重要だが、基本は文字で書かれた史料である。しかし、史料には、ある事件を書き手はそう見た、少なくともそう見たことにしたい事柄が書かれているに過ぎない。別の書き手がいたら、全く異なった出来事が繰り広げられたと描く可能性が大いにある。最近では使われる機会が減った「群盲象をなでる」ということわざを思い出させる状況である。歴史学は、既に消滅して接近のしようがない過去そのものを直接に研究するのではなく、過去に書かれて、今日偶然に残った文献の研究をしているに過ぎない。歴史上の人物が筆まめであったかなかつたかは、その後の歴史像に少なからぬ影響を及ぼす。また、これまでに手がかりとなるはずの史料が数多く失われてきた。例えば、織田信長が比叡山を焼き討ちしなければ、あるいは関東大震災と空襲がなければ、今日の日本史像はずいぶん異なったものになっていたかもしれない。

しかし、近代の歴史学は、こうした足元に目を向けるよりも、＜科学＞の一分野として自らを確立させることの方に熱心であった。そこで重視されるのが、因果律である。例えば、著名なイギリスの歴史家 E・H・カーは、『歴史とは何か』（清水幾太郎訳、岩波新書、1961年）の中の「歴史における因果関係」という章で、この問題を次のように論じている。「他のすべての科学者もそうですが、歴史家も『なぜ』と尋ね続けるところの動物なのです」（傍点引用者）ととらえるカーは、「歴史の研究は原因の研究」だという。たしかに、「すべて人間の行動は、どういう見地から見るかによって、自由でもあり、決定されてもいる」が、「人間の行為には、原則的に確かめ得る原因がある」。「歴史家の世界は、現実の世界を写真にとったものではなく、むしろ、有効性の差こそあれ、歴史家をして現実の世界を理解させ征服させる作業上のモデルなのであります」ともいう。錯綜したいきさつを因果関係の体系として整理し直し、「征服」するのが、歴史家の仕事と見るようである。そして、カール・ポッパーやサー・アイザイア・バーリンのような、歴史に法則性を見出そうとする試みに疑問を呈する論者を批判して、次のような事例を紹介する。

ジョーンズがあるパーティでいつもの分量を超えてアルコールを飲んだの帰途、ブレーキがいかれかかった自動車に乗り、見透しが全く利かぬブラインド・コーナーで、その角の店で煙草を買おうとして道路を横断していたロビンソンを轢き倒して殺してしまいました。混乱が片づいてから、私たちは——例えば、警察署——に集まって、この事件の原因の調査をすることになりました。これは運転手が半ば酩酊状態にあったせいでしょうか——この場合は、刑事事件になるでしょう。それとも、いかれたブレーキのせいでしょうか——この場合は、つい一週間前にオーバーホールした修理屋に何か言うべきでしょう。それとも、ブラインド・コーナーのせいでしょうか——この場合は、道路局の注意を喚起すべきでしょう。われわれがこの実際問題を議論している部屋へ二人の世に知られた紳士——お名前は申し上げますまい——が飛び込んで来て、ロビンソンが煙草を切らさなかったら、彼は道路を横断しなかったであろうし、殺されなかったであろう、したがって、ロビンソンの煙草への欲求が彼の死の原因である、この原因を忘れた調査はすべて時間の浪費であり、そこから導き出された結論はすべて無意味であり無益である、と滔々たる雄弁をもってわれわれに向って話し始めました。それなら、われわれはどうすればよいのでしょうか。われわれは流れるような雄弁を辛うじて遮って、この二人の訪問者を鄭重に、しかし、力をこめて扉口へ押して行き、この人たちを二度と入れてはいけない、と門衛に命じて、われわれの調査を続けるでしょう。

カーは、明らかに原因と責任という次元の異なる問題を混同している。ここでは、交通事故の処理という予めやり方が決められている一般的な規範に、個別事例をどう当てはめるかが問題になっているに過ぎない。この事故を如何に処置すれば、社会秩序を守れるかが課題であり、出来事そのものへの理解を深めることが目的ではない。例えば、晴天時か雨天時か、昼間か夜間かを比べれば、後者の方が事故の発生率は高い。しかし、交通事故を起こした者の処分をする際に、こうした原因は通常無視される。これも、当事者の責任を追及して社会の安定を保つことに、目的があるからである。責任追求・制裁という規律維持を目的とした行為と、原因・結果の解明という認識方法は、質の異なる営

みである。日本は侵略戦争をしたとか、戦争責任があるなどと歴史学者が言いつるのは、この二つの区別がつかないためである。ただし、交通事故を減らしたい、戦争を防ぎたいといった目的意識を持って行なわれる因果関係の解明は、責任論を呼び込む素地を元々持っている。

より根源的な問題は、こうした因果関係というとらえ方そのものにある。この挿話を、交通事故処理の事例という枠から解き放ち、ロビンソンが死んだという一回限りの出来事として見れば、彼が喫煙家であったことは大いに意味を持ってくる。あるいは、仮にジョーンズが、パーティのホストに声をかけられて立ち話をする事なく、五分早く現場を通過していれば、事故は起きなかったはずである。のろのろと走る車を追い越さずについて行けば、こんなことにはならなかっただろう。直前にロビンソンはテレビでサッカーの試合を見ていたが、延長戦が無ければ、煙草屋へ行く時刻も早まり、死なずに済んだに違いない。あるいは彼の歩く速度がもっと遅ければ等々と、この事故が起きた原因を探れば、飲酒運転や自動車と道路の状態と同じような要因が、数限りなく出てくるだろう。そこにあるのは、たまたま事故が起きてしまったという事実だけである。我々の日々の経験は、無数の原因と無数の結果とつながっている。人は、底知れぬ混沌の中で生きている。

しかし、人間は直接こうしたカオスと向き合って生きることが出来ない。さまざまな仮構、言い換えれば文化という船を作って、混沌世界に浮かんでいる。カーが歴史研究は原因追求だと考えるのは、将来同じような過ちを犯すことを避け、より良い時代を作っていくための手段にしたいからだろう。これも、近代になって登場した科学的接近方法という仮構の一つである。科学とは、一回限りの物語を描くことではなく、繰り返される法則性の発見をめざすものである。そして、研究者は調査や実験、分析や計算という客観的方法で対象に立ち向かう。しかし、歴史学ではタイムマシンに乗って現地調査に赴くことなどできない。きわめて限られた、偏りのある主観的な記録を読み込むだけである。つまり、自らを科学とする手段を予め奪われている。後に述べるように、実は歴史学に限った問題ではないのだが、少なくとも歴史学は科学的方法を使えない。それゆえ、因果関係の科学的証明などは、そもそも不可能である。戦争体験から人々は実に多くの教訓を学んでいるが、そのうちのどれが科学的に正し

いかなど、誰にも判定することは出来ない。

それでは、歴史を研究することにどんな意味があるというのか。史料から分かるのは、過去の出来事を当時の人々がこのように書き残したということだけである。彼らが戸籍や土地台帳を作って精細に現状を記録していれば、そうしたやり方で、自らの営みをとらえようとする時代だったことが分かる。平安貴族の詳細な日記からは、彼らが宮中儀礼などでの先例を踏襲することを重視して生きていたと知ることができる。このように、過去の人々が世の中をどう見ていたかを、たまたま残った史料から思いやるだけである。江戸時代や明治時代の日本にやってきた西洋人は、一握りの特権階級と大多数の貧民からなる他の東洋諸国とはまったく異なる、自由で分厚い層をなす中産階級が勤勉に働いている社会に驚いて、それを記録に残している。しかし、当時の日本人にはそれは当たり前すぎて、わざわざ書き記すことではなかった。外国人の目を通して、我々はその詳細を初めて知ることができる。

最近小学校社会科教科書の日本史の叙述をまとめて読み、そのあまりにも露骨な階級対立史観に驚いた経験がある。一例を挙げれば、万葉集について、貧窮問答や防人の家族を思う歌ばかりを上げて、当時の一般庶民が苦しい生活をしてきたことを強調する材料としてしか扱われていない。万葉集全体を見れば、天皇から庶民まで様々な立場の人々による多彩な歌が収録されている。その豊かな表現の集大成に価値があるのに、そうはとらえない。貧困や義務に伴う苦難はいつの時代にもあることで、むしろそれを含めた人間の経験をこれほど数多く歌ったところに驚くべきだろう。北朝鮮でならば、こんな嘆きを公然と記録に残すことは出来ないが、だからといって貧困が実在しないわけではない。こうした苦しみまで表現できたところに、古代日本の特色があると見るべきではないか。歴史学とは、例えば戦争再発防止といった現在の価値規範を投影して過去を裁断するのではなく、未来を知らずに生きた過去の人々が言葉に込めた思いを、忠実にたどることに尽きるはずである。そして、日本史とは、自分の中に仕込まれてしまった日本語や日本的価値観への理解を深めるために、過去を振り返ることに他ならない。

2. 都市社会学の成立

以上が、筆者の考える文献史学の意味である。これに対して、社会調査という歴史学にはない科学的な武器によって、研究対象に立ち向かえる都市社会学はどうであろうか。何の解明を目指し、どのように社会調査という方法を使ってきたのか。本書に従って、近代日本の経験をたどっていきたい。

著者によれば、「都市社会調査の出発点」は、「近代大都市の勃興に対する驚きと、そのなかで生じた貧困をはじめとする社会問題を対象化したいという欲求」にあった。明治期に書かれた都市下層社会のルポルタージュが、その嚆矢であったが、こうした手法が社会学に受け継がれることはなかった。その後大正9年（1918）に内務省社会局が設置され、社会行政が本格化する。そのため行政による社会調査が進んだが、それと共に民間の調査活動も盛んになる。大正13年に組織された東京帝国大学セツルメントに調査部が置かれたり、協調会、大原社会問題研究所（共に大正8年設立）、東京市政調査会（大正11年設立）といった本格的な調査機関が出現している。こうした日本における社会調査の本格化の背景には、世界大戦後に勃興した新思潮の影響が大きいと考えられる。この大戦争は空前の総力戦となった結果、労働者や女性の社会的地位が向上し、デモクラシー思想の擡頭をもたらした。その一方で、総力戦に耐えられなかったロシアには、共産主義国家が出現した。大戦の戦場となったヨーロッパを中心に勃興したデモクラシーとマルクス主義の風潮は日本にも拮がりを見せ、さまざまな「社会問題」が注目を浴びるようになっていく。このような個々の国家の歴史的いきさつを超えた国際的な改革思想に触発されて、社会調査が組織的に始められた側面に注目したい。

この頃、アメリカでは社会事業などをきっかけとする社会踏査がさかんになり、それが「1920年頃から本格化する社会科学の科学主義化」に追随して、シカゴ学派都市社会学が形成されている。昭和期に入ると、その業績が日本でも紹介されるようになり、さらに「社会調査とアカデミズムの距離も1930年代後半にはかなり接近しはじめていた」という。こうして日本でも都市社会学の研究が始まるようになる。

その創生期の中心的な当事者として、著者は慶應義塾大学で社会学の講座を担当した奥井復太郎に注目し、その業績を詳しく紹介している。それまでの社

会調査はスラム街などを対象とする「異質性認識型、異文化探訪型」の手法が採られてきたが、奥井の手法はこれとは全く異なっていた。彼が研究対象としてこだわったのは、自らを育んだ東京である。しかも、十九歳で葉山に転居してからは、東京まで遠距離通学・通勤をする身として、東京を外から見る視点をも持っていた。彼は、自身も含まれる新中間階級の地理的な分布に注目し、この時期急速に広がる彼らの生活圏の様相を通して東京を見ようとした。

こうした東京研究は、とりわけ戦後に顕著になるのだが、次のような特異な都市観に支えられていた。彼にとって、都市化とは「土民性から国際性へ、郷土志向から普遍的選択的志向へ、人びとの心性が近代的なものへと変化すること」であった。都市社会とは「人間解放の場」であり、「世界的人格を持った市民こそ、現代大都市にふさわしい都会人である」と考えたという。その担い手として新中間層に期待をかけたが、東京の現状は彼の理想とはほど遠く、「日本に都市なし」「日本は至るところ、ことごとく田舎である」という絶望感が表に出てくるようになる。こうした市民観については、後に改めて触れたい。

ところで、奥井が行った代表的な社会調査として、昭和12年(1937)に行われた鎌倉町調査がある。東京生活圏の飛び地へと変貌している鎌倉についての大規模な戸口調査である。そして、これと昭和29年から二年をかけて実施された近江哲男による鎌倉市調査とが比較される。奥井の調査では、「東京の山の手から脱出した『新中間階級』の鎌倉」という姿が浮かび上がってくるが、近江は「必ずしも十分でない生活に悩む平凡な人びとからなる普通の地域」が描き出される。こうした差が生じたのは、たしかに、戦争をはさんで鎌倉のあり方が変貌した側面もあるが、それ以上に「2人の思考や視座にある先有傾向」によるのではないかという。「社会調査には『見たいもの』を見てしまう傾向がどうしても存在する」。そこから、彼らの「『発見』は調査データに十分に根拠づけられているか」という問題点が見えてくる。著者は、この点を手がかりに、「都市社会調査の臨界」を次のように指摘する。

ひとつは、「個別の個性ある都市を事実上の母集団としつつも都市一般レベルに議論を展開させようとする欲求、つまりその調査が『調査していないこと』を調査結果の考察過程に織り込もうとする誘惑を、いかに適切に処理するか」という問題である。これは近江の調査に顕著なのだが、「基本的論理のレベル

から統計学に深く依拠するようになった調査方法論には、母集団の外部を把握する技法は存在しようもない。にもかかわらず、「統計学的論理の枠組から外れる領域にまで踏み出」してしまっている。

もうひとつは、社会調査は「人と人の空間的共存のあり方を何らかの角度から切り取ろうとすることをその根幹としている。しかし、量的な質問紙調査であろうと質的インタビュー調査であろうと、調査単位が個人である限りは、人びとのつながりそのものを直接調べることはできない」という問題である。奥井と近江の調査が露呈させた、社会調査が抱えるこの根源的な「臨界」への自覚が、現在の社会学者にはあまりにも乏しいのではないかと、著者は問いかける。

この二つの困難から抜け出すことは、きわめて難しい。「個性ある都市」という時の個性とは、他の都市と比較する意識によって見えてくるものだろう。そもそもある都市を調査をする動機も、自分なりの都市観から特に興味をひかれる所、つまり「見たいもの」があるためではないか。また、たしかに当事者にならない限り「人びとのつながり」は見えてこない。このような、研究者の見たいものが分析を通して本当に見えてきてしまうという問題と、分析対象そのものには直接触れられないという点は、文献史学も共有している。歴史分析では、多くの文献を読み、その中から重要と思われる部分を引き抜き、それを整理して歴史像を造る。史料の取舍選択に客観的な法則があるわけではないから、こうした同義反復の世界から自由になることは出来ない。その一番低俗な例が、先に挙げた小学校教科書での万葉集の扱いである。また、残されているのは、主に文章であり、その文章を読んで起きた事柄について想像力を働かせる以外に手がかりはない。歴史学は、現実ではなく言葉の世界に浮かんでいるに過ぎない。

こう考えると、科学的裏付けを持たない文献を読み込むという手段しか持たない歴史学と、社会調査という科学的な研究方法を持っているはずの社会学とは、案外似たもの同士だと言えないだろうか。これは、歴史学や社会学に限らず、社会科学や人文科学と称する法則性を追求する言語領域が、ジョーンズがロビンソンを轢き殺した事件を扱う際のような混沌を、簡単には突破できないのではないかという問題へとつながっていく。

3. 戦後の都市社会学

戦後日本の社会調査は、アメリカの手法を本格的に導入することから始まった。「社会調査を学問活動の基盤に位置づける経験主義的な研究スタイル」が取り入れられ、統計的な調査を支える推測統計学、とりわけランダム・サンプリング（「無作為抽出法」）論が使われるようになる。ここで著者は興味深い指摘をしている。ランダム・サンプリングが理論的に優れていることは知られていたが、実際に社会調査で使われる例は、アメリカを含めて多くなかった。ところが、日本は例外であった。「日本では住民基本台帳や選挙人名簿、米穀台帳などがサンプリング台帳として容易に利用することができたが、そのような包括的かつアクセス可能な名簿が存在する国は稀である」。この状況は現在でもおおむね変わっていないという。これ以降、ランダム・サンプリングが、都市社会学の手法として繁茂するが、それを支えたのは日本特有の土壌であった。

そのランダム・サンプリングを武器の一つとして、日本が独立を果たした昭和27年頃、西暦で言えば1950年代前半から、都市の総合調査が盛んになる。社会学者に限らず、地理学者、都市計画・建築学者、政治学・行政学者らが共同で実態調査を行い、学問的な成果だけではなく、都市経営や計画・政策の立案への貢献も目標となった。しかし、研究手法の違いから学際研究としての成果が出たとは言いがたく、「総合の概念に込められた多様な期待はあまり実を結ばず、しだいに縮小あるいは変質していった」。特に学問研究の部分が弱くなり、計画・政策立案の側面が肥大化していったという。そうなった理由は、そこでの研究成果が知的好奇心を刺激するような内容に至ってなかったためだろう。例えば、「日本都市学会の総合調査として最初のピークに達する力の入った」、名古屋を対象とした「大都市の機能調査」では、周辺町村居住者を調査して、次のような結論を出したという。「住民は現状への不満を合併志向へと転化させており、とくに高学歴者に合併賛成者が多い。合併先としては名古屋市が望まれており大都市志向が見て取れる」。これは結論を極めて簡略にまとめたものだから、この結論に至る過程に興味深い分析があるのだろう。しかし、これを読む限り特に意外性はなく、「だからどうした」と突っ込みたくなるような内容である。別の箇所でも、「それまでの都市の社会学的研究は、た

とえ綿密な実証研究を意図したものであっても、市勢要覧と大同小異なものではないといった批判を受けることが少なくなかった」という指摘がある。科学的研究さえしていれば、それで良いのかという問題である。

こうして都市の総合調査は衰退していくが、当時の代表的な都市社会学者三名の業績が、次に紹介される。磯村英一と矢崎武夫と鈴木栄太郎である。その中でも、矢崎の仕事にとりわけ注目したい。元々一般企業に勤めていた彼は、クリスチャンであった縁から、教会を通して留学生に選ばれ、昭和24年から三年間シカゴ大学で学んでいる。ここで習得した社会学の手法をそのまま適用して書いた「東京の生態的形態」が、彼の最初の仕事である。いわゆるシカゴ学派の強い影響下にあった当時の都市社会学者たちに、これは強い衝撃を与えたという。しかし、矢崎は、シカゴ学派のような「米国の都市社会学が米国の都市分析の結果発展して来たように、日本の都市社会学は日本の現実に密着したものであることの必要を痛感」するようになる。そして、アメリカの都市とは異なり、「伝統的な日本文化の基盤の上に」形作られた日本の都市を、歴史的に研究し、『日本都市の発展過程』という成果をまとめている。しかし、「一都市の枠組みをはるかに超えた権力の動きや経済の変動に着目して都市を説明しようとするその議論は、もはや周囲の都市社会学研究の潮流とはほとんど交わり得ないものとなっていた」という。アメリカの社会学理論で分析される日本の都市には興味を持つが、日本の歴史の中で日本の都市を見ようとする手法に無関心な傾向については、後で改めて検討したい。

ところで、磯村英一や鈴木栄太郎は、都市を地理空間としてとらえ、そこでの人間活動を解明しようとする人間生態学という手法を採っていた。実際には限られた範囲での社会調査に止まっていたが、これを本当に達成させるためには、現地でのフィールド調査も含め「巨大な都市社会を相手に、人間と地理的広がりの方を見据えた膨大な社会調査をしなければならない」。しかし、それが事実上不可能であることが明らかになると共に、こうした手法からアーバニズム論へと、都市社会学は転換していく。

昭和30年代半ばから日本で盛んになるアーバニズム論とは、「都市社会を地理的秩序という『面』で捉えるのではなく、そこに住む人びとの社会生活として捉えようとするものであった」。そのために、「都市の一般住民を対象とし

たサーベイ調査で得たデータをもとに、住民個々人の意識の次元から社会構造の次元へと結びつけて把握しようとする」。こうした研究を先導した倉沢進は、次のようにして、「標準化調査法」を編み出した。意識を「行動原理」「価値志向」「共同体の価値」「個人の主体性」の四次元に整理し、それを「家族」「近隣」「職場」「マスライクな非集団場面」の四場面ごとに細分化して、合計十三（ $4 \times 4 = 16$ だが、現実的意味のない三つを除外）のカテゴリーを作り、それぞれについて、サーベイ調査を行う。その分析を通して、都市化の形態・構造・意識の関連を解明していくという。こうした「都市化アプローチ」は「時間的推移や歴史的事象を扱わずとも解明し得る方法」であり、「個別具体的な地域の個性や文脈は捨象して、調査地の特性はあくまでも抽象化された地域類型のなかの一事例、一標本として位置づけ」られるという。そして、これまでその存在の欠如という論じ方が多かった「市民意識」について、「市内のニュースへの関心」「市民団体への態度」「各選挙への投票行動」「自治のあり方に関する意見」「町内会への態度」という五項目をもって「市民意識尺度」による調査を導入した。ここでも、「市民意識概念の混乱ないしあいまいさをさけるため、地元意識の要素を排除した」という。このように、抽象的な市民意識を最初に概念化し、それに基づいた質問項目を作って数量的調査を行い、歴史性や地域性を超えたデータによって社会構造を解明する。観念的な枠組みの中に最初から自分を閉じ込め、一寸先は闇である混沌とした現実との接触を避けている、そんな姿が浮かんでくる。ここに示される成果は、門外漢には何の魅力もない。人間や社会に対するより深い洞察の糸口になるとは思えず、平板なレッテル張りにしか見えないからである。

何故そうなったのか。それは、自らの研究が科学であることを証明したいという意識に捕らわれすぎたためといえる。都市総合調査にしても人間生態学にしても、空間としての都市と向き合うことを出発点にしていた。しかし、そこで二つの困難にぶつかる。ひとつは社会全般の中で科学的な位置づけが出来ない点である。もう一つは退屈な現実しか見えてこないという点である。

前者についていえば、それが当然だとは認めがたいようである。しかし、E・H・カーの交通事故の例を引き合いに出したように、人間社会で起きたことを科学的な因果関係で説明し尽くすのは不可能だと思い知るべきであろう。もち

ろん、人間は多くの因果律を知っている。火に手をかざせば火傷をする、陶器を床に落とせば割れる、誉められればたいいていの人が喜ぶ等々、経験的にさまざまな知識を持つ。そんなことは、科学とは無縁の時代から、人々には分かりきったことだった。しかし、そうした因果関係からなる法則性で、社会の事象全般を説明できると考えるのは、社会科学の妄想に他ならない。もしも、これまでの出来事の因果関係がすべて分かるならば、現在の社会を徹底的に調査すれば、未来予測も可能になるはずである。しかし、そうした可視化は絶対にあり得ない。世の中は理解可能な因果律の連鎖で形作られているわけではない。例えば、競馬やプロスポーツの面白さはそこにある。そう思い知ったら、たまたま起きてしまったことを、いかに想像力を刺激される形で描くかに尽きるだろう。科学的であるかどうかよりも、読み物として興味を惹かれるかどうかの方が重要になってくる。例えば、日本史の叙述を振り返ると、吉村昭は、凡百の歴史研究者の業績などとは比較にならない位優れた作品を、数多く産み出している。司馬遼太郎となると、説教が入り筆に狸の毛が相当に混じっているが、無視しがたい歴史小説を生み出している。これらの作品は、日本人の歴史意識を形作る上でも、大きな影響力を持っている。このように、歴史叙述では、文章の臨場感が決定的な意味を持つ（と私は思っている）。同様に社会学でも、極めて優れたルポルタージュに、社会学の分析はかなわないという見方があっても良いように思う。

時は次々に過ぎ去り、眼前の現実をあっという間に過去という幻の世界に押しやる。過去は曖昧な記憶として、あるいは断片的な記録として残るだけである。歴史学は既に過ぎ去ってしまった世界と最初から向き合おうしているが、社会学を含めた他の人文社会科学も、根本において違いはない。事象を捉えた瞬間に、それはとらえどころのない過去になっているからだ。アーバニズム論が出来事としての歴史を超えた社会構造を捉えたつもりでも、今日から見れば、間違いなく過去の一時期の現象と向き合っているに過ぎない。そして、次々に過去になっていく現在は、因果関係を超えた混沌とした世界である。都市社会学は歴史学とは異なり、社会調査という独自の手段を持つ分、科学的解明への期待が強いのだろう。自らを科学の一分野にしたい、しかし人間生態学のように眼前の現実と直接向き合うと、その理論化が困難なことに直面する、そのた

めに、アーバニズム論のように科学的な、しかし実は観念的な枠組みの中に引きこもってしまったといえるだろう。

もう一つの点、分析結果がおもしろみを欠くことは、方法論よりも何のために研究をするかという目的論と関わる。横山源之助や松原岩五郎らによる明治期の下層社会探訪記は、新たに登場した特異な世界を驚きの目で記録したために、今日でも読み継がれる程の力を持っている。こうした先駆者のやり方を「異質性認識型、異文化探訪型」というが、下層社会の住民も自分達の同胞であり、仲間であるはずの彼らの実態を広く同じ日本人に知らせたいという問題意識が、こうした探訪記を書かせたといえる。しかし、一旦アカデミズムの中で一定の地位を得ると、社会学者以外の者でも興味をひかれるような主題を発見する能力が著しく低下するようになる。この意味で、著者が実現はしなかったが「あり得たかもしれない都市社会学」として紹介している事例は興味深い。広島大学原爆放射能医学研究所に所属していた社会学者湯崎稔が、戦後二十年前後に NHK と提携して行った爆心地復元調査である。これは当時の広島で大きな反響を呼び起こし、多くの人びとの証言が得られている。例えば、区画整理で失われた昔の町並みを再現しようという活動をして、これほどの反響はなかったに違いない。原爆を投下されるというむごい経験に深く傷つき、それを皆が共有しているという意識があるからこそ、失われた市街地、そしてその市街地である時見聞きした出来事が、かけがえのない記憶として甦ってくる。そのような〈物語〉が大切だろう。世界は混沌としているが、人間はそこに物語を見出して生きている。日本史とは、日本人の来歴をめぐる物語であるし、夫婦、親子、兄弟と形作る家族のかけがえのない思い出も、物語である。人は皆さまざまな物語に包まれて、混沌世界に浮かんでいる。こうした物語を再構成するという形でテーマを設定しないと、都市社会学は魅力を持たないだろう。

4. 市民か国民か

その場合に問題になるのは、都市社会学は誰を主役と想定しているかという点である。本書で繰り返されるのは、〈市民〉という言葉である。日本で都市社会学研究が始まったのは、第一次世界大戦後に社会問題が注目されるようになってからである。研究手法はアメリカという人工国家で形作られた社会学の

影響を多大に受けている。奥井に典型的に見られるような、非歴史的で国際主義的な前提が、そこにはあるといえる。

しかし、宇都宮市民とか広島市民という以上に、市民という言葉の意味を扱いたくない者にとって、この出発点から違和感を懐く。戦後日本では、これまでの日本の歩みを否定的に見ようとする傾向が長く続いている。戦後の社会科学者の多くは、欧米の学問の視座から日本を見ていて、日本そのものの中に深く入ろうとはしない。これからの日本を構成すべきは、近代社会に普遍的な市民であるとみて、伝統文化に支えられた日本国民という観点を避けようとする意識である。それは、日本の歴史を研究しているはずの学者をも支配していた。例を挙げておこう。

鶴見俊輔は『日常的思想の可能性』（筑摩書房、昭和42年）の「あとがき」で次のように述べている。「近頃、私は、丸山真男氏から自分の書いているものの核心にとどく批判をうけた（『思想の科学』、一九六七年五月号）。それは、一つは、日常的ということをややすく日本的ということにおきかえるなどという批判である」。『思想の科学』に載ったのは「普遍的原理の立場」という鶴見と丸山真男の対談である（『丸山真男座談』7 岩波書店、1998年所収）。ここで丸山は、次のような「日常的な経験」の例を挙げて、日本的という用法を批判している。

たとえば、地下鉄に乗ったり、雑踏にもまれて歩いているときに、わたしの感覚のなかでは、自分はいま日本にいるからとか、隣にいるおばさんは日本人だとか、そういうのはほとんど意識しない。イギリスの地下鉄に乗っても隣にいるのはただの人間でね、むしろ、ふと自覚的に、ああおれはいまイギリスにいるんだな、と思った。帰ってきて間もなくこんどは、御茶ノ水の雑踏にもまれて、ふと自覚したときに、初めておれはもう日本にいるんだな、と思う。わたしは英会話はおそろしく苦手なので、これは語学の問題とは思われない。これは日本とかイギリスとかいうことじゃなくて、たとえば、いま未知の編集者とかどこかの会社の人が訪ねてきたとします。名刺を出されれば、ああ何会社の人かと思えます。だけど、何か世間話でもはじめれば、編集者も何会社の社員も何大学の教授もへったくれもない、ただの一人の人間と一人の人間とがダ

べっているという感じになっちゃう。

どこの国や組織に属しているかで他人を区分するのではなく、生身の人間として接するのが自分にとっての日常であり、それを日本という特殊な枠組みの中に閉じ込めないで欲しいと、丸山は言いたいようである。市民という言葉は使われていないが、ここに言う「人間」とは、明らかに国民ではなく市民に限りなく近い存在である。これに対して、鶴見は「私は、自分のものの言いかたのあいまいさをまずいと思う。今の日常状況にあるものからはじめて考えたらどうなるか、という仕方考えを進めてゆくことが、自分の方法であるはずだし、それを不用意に日本的なものと結びつけないようにしてゆきたい。日本的なものについても私は関心をもっているが、それは、別のこととして追求されなくてはならないだろう」（前掲『日常的思想の可能性』）と殊勝に反省する。つまり、日常と日本は別々に取り扱うべきだと考えるようになっている。しかし、両者を分けることはできるのだろうか。

丸山の「わたしは英会話はおそろしく苦手なので、これは語学の問題とは思われない」とは、理解し難い発言である。彼がかなりの英語の使い手でなければ、成り立たない状況だからである。車内放送が聞きとれ、運転経路表や中吊り広告などが読め、「どうぞおかけ下さい」とか「失礼」といった会話を乗客同士が交わせるのを、地下鉄内の日常というべきだろう。苦手とは、これらを完全にはやりこなせないという意味なのだろうか。そうだとしたら、日本での日常とは微妙に異なってくる。さらに、ソウルや北京の地下鉄に乗っても、同じ思いに浸れるだろうか。韓国語や中国語が分からなければ、異世界に一人取り残された孤独を味わうに違いない。かつてのニューヨークの地下鉄ならば、別の意味で日常にはならなかった。日本には日本固有の日常があり、イギリスにはイギリス独自の日常がある。それぞれの国の日常を、その場から切り離すことはできない。

もちろん、他国の日常と日本の日常との間に共通点は多々ある。特に今日のように相互の交流が盛んな時代には、都市作りにおいても、音楽や食文化などにおいても、共有される部分が多くなっている。日本の地下鉄とイギリスの地下鉄は、言葉の問題を除けば、よく似ているのかもしれない。最近では、外国

人の地下鉄利用が日常的な風景となり、外国語表記も当たり前になっている。しかし、東京を動かしているのは、抽象的な人間・市民ではなく、日本語を使う日本人・日本国民である。日本語を理解できない外国人にとって、東京に居ることは非日常であって、日常ではない。

編集者らとの会話にしても、ともに日本語を話せることが大前提である。また、仮に未知の編集者や会社員の話し方が、家族や友人に対するような砕けた口調だったら、丸山は馴れ馴れしいと思ったに違いない。あくまで、用事を頼みに来た編集者なり会社員と東大教授丸山が、それぞれの役割を演じながら会話しているに過ぎない。日本語では、男女で言葉遣いが違うし、相手との関係で喋り方が変わるのが当たり前で、「ただの一人の人間と一人の人間とがダベっている」だけという抽象的な状況で、どんな話し方がされるかなど想像もつかない。これは外国語でも同じことだろう。アーバニズム論の研究者と同じように、丸山も自らを観念的な^レたがの中に押し込めている。少なくとも外国語を理解できない日本人にとっての日常とは、日本語が通じ日本的な価値観に支配される世界だけであって、それ以外に日常はない。

このように日本を重視するのは同義反復であって、日本が大事だと思うから、日本という切り口が重要に見えてくるともいえる。同様に、市民が大きな存在だから、市民の担う社会が基本に見えるのだろう。しかし、人類が進歩し豊かになれば、どこの国でも普遍的市民社会に到達するだろうという仮構を、現実の国際情勢が間違いなく突き崩している。ヨーロッパにおける移民・難民問題の深刻化、スコットランドやカタルーニャの独立への試み、イスラム原理主義の擡頭、中国の尊大な膨張主義的ふるまい、韓国の頑なな反日姿勢等、今日の世界は、普遍性よりも歴史を共有する個別の集団のぶつかり合いの方が決定的なことを、はっきりと浮かび上がらせている。

日本国内に目を移しても、日本というまとまりが強くなっている。都市社会学における都市とは、明治までの日本人の大半が暮らしていた伝統的な農村とは異質の近代的な存在であった。しかし、その後都市化が進んだ果てに、今日では日本全体が一つの都市になったともいえる。今から六十五年前の昭和 25 年に産業別有業人口の半分を占めていた農林水産業従事者は、現在 3%程度に激減した。自動車が普及し、ほとんどの日本人は、コンビニ・スーパー・外食チ

エーン・大規模家電店などを日常的に利用できるようになった。テレビ放送によって標準語が浸透し、ネットの普及で日本語による情報を全国どこでも同時に入手できる。新幹線と飛行機の発達は、日本中をほぼ日帰り圏内にした。一極集中の極にある東京の存在は無視できないが、かつて都市と農村の間にあった、生活・文化水準や情報量の大きな落差は消滅したといえるだろう。日本の都市社会学とは、ほとんど日本の社会学と同義になったといえるだろう。そうだとすると、その構成員をどう呼べば良いのか。〈日本市民〉となるのだろうか。しかし、日本とは、単に地域を指すだけではない。そこに住む日本語を使う人々には、市民など全くいなかった時代から営々として培われた日本文化が根付いているし、そうした歴史を共有するまともは、占領期を除いて常に対外的に独立した存在であり続けた。彼らは〈日本国民〉としか呼びようがない。「異文化探訪型」から「自己認識型」調査への転換が、都市社会学の趨勢とされるが、自己とは何かが改めて問われている。

これと関連して、最後につけ加えたいことがある。日本の敗戦をどうとらえるかという問題である。本書では、「第二次世界大戦の敗戦は解放でもあった」、「政治的社会的な拘束からの解放」、「戦時体制下で停滞していた学問研究が息を吹き返した」といった評価がされている。もちろん、戦時中に「防諜政策の一環として社会調査や国内（内地）に関する統計の発表が厳しく制限されるようになっていた」のは当然であり、そうしなければ総力戦を戦い抜くことは出来ない。これは戦争当事国全てに当てはまり、日本に限った話ではない。しかし、侵略的で抑圧的な日本が、敗戦によって平和で自由な日本になったという文脈で捉えられるのならば、疑問が生ずる。こうした「解放」のイメージを総論として語りながら、具体的な記述からは、それとは異なる様相が浮かび上がってくるからである。

本書では、「極端な国家主義のもとに、社会科学の研究の自由はなく、もとより実証的研究の余地はせばめられ、わずかに『聖戦』の遂行に支障を来さない限りでのやや好事家的な採集調査か、日本の帝国主義的侵略のもとにあった東亜の諸民族の『客観的』な社会人類学的調査しか許されなかった状態」（島崎稔）といった〈正義派〉の高みに立つ強張った文章が、そのまま肯定的に引用されている。ところが、その直後に、「しかしこのような時期にあっても、

社会調査の画期をなす新しい試みもなされていた」と続き、その事例が紹介された上で、「戦後から今日へとつづくその後の社会調査の展開に連なる基盤を用意していた時期でもあった」とまとめられる。つまり、戦時期の研究が戦後期へと連なるという展望が、本文の記述から浮かび上がってくる。

戦中期でも社会学科は、アカデミズムの一部門として手厚く保護され続けた。例えば、鈴木栄太郎は昭和 20 年に「京城帝国大学に赴任すると、朝鮮半島をフィールドにした調査に力を注ぐようになる」。そして翌 21 年には東京で GHQ 民間情報教育局の顧問となり、その後北海道大学に就職している。彼は、昭和 16 年に部落会・町内会論を発表しているが、その中で「現に其整備を進められて居る町内会はかくの如き私的なものではなく万民翼賛の実をあげる為に其は国家的に必要な公的機関であり、かくの如き機関の整備拡充は臣道実践の為に必要である」と主張している。鎌倉を調査した奥井も、昭和 14 年に「近来流行的になっている近隣団体の組織化について、最も重要な基礎」になると強調したという。戦中期の都市社会学者も時流に棹さず存在だった。

また、戦争直後にさまざまな社会調査が行われたが、「戦前の都市社会調査と非常に類似しているという点では際だった特徴がある」という。そして、昭和 21 年 6 月に、GHQ が政府に対して世論調査禁止を通告したことも指摘されている。明言されていないが、徹底的な言論統制の下で行われた GHQ の占領政策が、逆に日本人の世論調査によって制約を受ける可能性を排除したためと解釈できる。このように、都市社会学史の視点からは、「解放」という事態がまったく見えてこない。敗戦は「解放」であったという紋切り型の見方を、本文の記述自体が突き崩しているといえる。

おわりに

都市社会学は、＜市民の科学＞による支配から抜けだし、＜国民の物語＞を取り込むことが必要ではないだろうか。これが松尾氏の著書を読んで、最も強く感じた点である。

しかし、問題は社会調査という独自の方法をどう考えるかにある。文字史料を相手にする歴史学とは異なり、生身の人間や現に活動している社会と向き合うことには、独自の困難がつきまとう。例えば、奥井が昭和 12 年に行った調査

で、早くも鎌倉町民の間から「明かな目的も示さず」、「他人の私事を調査する」ことへの反撥の声が上がっている。調査される側が自分たちにも有益だと思えなければ、協力は仰ぎにくい。この問題は、個人情報に敏感になっている今日では、より深刻となっている。広島の爆心地復元調査のような幸せな結びつきは、極めて例外的といえる。テレビは街頭調査や現場取材をしばしば行っているが、これはテレビに出られるという調査取材される側の期待に支えられている。このような見返り、例えば金銭的報酬によって、社会調査を行うのは無理だろう。そうだとすると、社会調査の可能性は次の三つに限られないか。

ひとつは、国勢調査や家計調査のように、学問に限らず、広く行政その他に役立つ調査をすることである。この点に関連しては、データ蒐集とデータ分析の関係が問題になる。「サンプリング調査法の普及により、官庁統計によらずに、研究者自身が個人を単位として調査する事を可能にした」（安田三郎）ことを背景に、「日本の都市社会学はその歴史的経緯や学問的系譜もあって、社会調査を行わない研究を受け入れない方向へ向かつた」という。しかし、両者を分けて考える場合もあって良いのではないか。歴史学でも史料蒐集を行うが、集められた史料はすべて整理分類するのが原則である。特定の研究目的のために作られた史料集は、それ以外の視点からの研究には役立たないからである。つまり、史料集の作成と歴史分析とは、はっきりと区別されている。経済学者が使う統計も、これに似ている。学生時代に数量経済史の大家である中村隆英氏から、自分の研究は、最初に統計からグラフや表をあれこれ作り、それを縦から横から色々に眺め、そこで見えてきたことをまとめて文章にするというやり方をとっているという趣旨の話聞いたことがある。最初に多様な内容を持つデータを幅広く集める作業が独立してあり、次いでその成果を研究者が独自の角度から分析するという手順を踏んだ方が、研究に広がりを持てるのではないか。なまじ、個人でデータ蒐集をできる環境が整ってしまったために、戦後の都市社会学はかえってやせ細っていった側面もあるように思える。ただし、こうした大規模な調査は、官庁やしかるべき調査機関が行うものだろうし、現状ではこれ以上新しい視角からの調査をする余地はないのかもしれない。そうだとしたら、社会調査を伴わず、既存の統計や新聞雑誌の記事などを駆使した研究に、もう少し寛容でも良いように思う。

二つ目の可能性は、調査対象と付き合いを重ねることで、相手の胸襟を開いてもらうやり方である。最初の方法が数量調査になるのに対して、定性分析が中心となる。いわゆるルポルタージュの手法である。松原岩五郎は、自ら貧民街で職業を転々として、住民達の暮らしぶりを描き出した。そうしたやり方を含む方法であるが、自分の問題意識を対象に投げかけることで、相手がそれを意識して、考え方が変化してしまう危険性もはらんでいる。

三つ目は、第三者の目に徹することである。今和次郎の考現学や磯村英一の都心生態調査のように、調査対象とほとんど関係を形作らない調査や町並みの観察といったやり方である。ここでは物語性が低くなるが、調査対象から拒絶される可能性は低くなるだろう。

以上は部外者の全く無責任な見立てであるが、こうしてみると、研究材料の蒐集という点では、文献史学の方がはるかに確実な気がしてくる。現代史研究で行われる当事者からの聞き取りを別にすれば、基本となる文字史料には全く揺らぎがない。これに対して、社会調査が多様な性格を持ってしまう所に、社会学の宿命的な困難があるように思えてくる。まさに、本書の目的はその解明にあり、これまでの試行錯誤について見事な整理をしているが、今後とるべき方法への明確な展望を持っていない。

それにしても、端から見れば、必ずしも豊かな成果を得られたとは言いがたい領域に対して、これほどの情熱をかけて綿密に明解に考察されたことに、とても感銘を受けた次第である。そして、なぜ感銘を受けたかといえ、この著書が一見社会学の専門書のようにでありながら、実は文献史学の手法で書かれているからだと思いついた。残された文献を手がかりに、過去の研究者の思いと営みを内面的に理解しようとするのは、まさに歴史学のやり方である。社会調査という社会学特有の方法ではなく、歴史学の方法を使ったから、説得的な物語を作れたという皮肉な結果が示されているように思える。歴史学者として成功された松尾氏が、今後社会学者としてどのような活躍をされるのか、大いに注目したいところである。